

# 浄土三部経

平成 31 年 1 月 4 日  
敏翁

私はここ数年、拙論「仏説大東亜戦争」の原点を探るべく仏典を探ってきました。その跡は、本ホームページに以下のタイトルで掲載した内容からもわかるでしょう。

タイトル	ホームページ掲載日
『仏説大東亜戦争』	平成 27 年 09 月 01 日
『ジャータカ、倉田百三と宮沢賢治』	平成 28 年 12 月 23 日
『宮沢賢治とグスコブドリ』	平成 29 年 02 月 23 日
『宮沢賢治と法華経』	平成 29 年 05 月 09 日
『宮沢賢治の研究』	平成 30 年 03 月 17 日

以上よりお分かりの様に、その中心は宮沢賢治が深く帰依した法華経でした。しかし昨年 4 月 26 日に家内が亡くなり、本タイトルの「浄土三部経」を読んでみる事にしました。と言うのは、我が家の菩提寺は J R 南武線の鹿嶋田駅ちかくにある「称名寺」で、ここは浄土真宗大谷派の寺なのです。

ご承知かも知れませんが、浄土真宗の根本経典は、浄土三部経、即ち『仏説無量寿経』、『仏説観無量寿経』、『仏説阿弥陀経』の三経典です。

以下、家内への供養にもと思い読んだ浄土三部経とそこからの私らしい(?)展開の一端を紹介させて頂きたいと思います。以下文体が変わります。

## I. 弥陀の本願

浄土真宗については、「歎異抄」を読んだり、「出家とその弟子」を読んだりした事はあったが、本格的に浄土三部経を読むのは初めてだった。

⑥ 中村 元・早島鏡正・紀野一義訳註『浄土三部経』上・下 岩波文庫  
1990 年改訳発行 2017 年第 56 刷発行  
を書店で求めて読んで見る事にしたのである。

ここでは、諸兄が掲題についての知識が殆どない事を前提に若干話しをさせて頂きたい。

⑥は、サンスクリット語(梵語)原典の現代語訳、漢訳及びその書き下しを基本としている。『仏説観無量寿経』だけは梵語の原典が見つからないので漢文和訳と漢訳・その書き下しになっているが。そして、いずれにも可成り詳細な註が付いている。

-----  
浄土宗や浄土真宗などにおいて、下記の漢訳経典を「浄土三部経」と言う。

『仏説無量寿経』2 巻 曹魏康僧鎧訳 252 年頃 (略称『大経』)

『仏説観無量寿経』1 巻 劉宋良耶舎訳 430-442 年 (略称『観経』)

『仏説阿弥陀経』1 巻 姚秦鳩摩羅什訳 402 年頃 (略称『小経』)

浄土宗では、『観経』を最重要視しているが、浄土真宗では『大経』を最重要視しているので、以下『大経』についてのみ触れてみる事とした。

『大経』は上下二巻で構成されている。その概要をウィキペディアより要約再掲する。  
-----

### 上巻

ある国王が世自在王仏のもとで出家し法蔵菩薩と名乗り、偈文を作り師を讃嘆し、諸々の仏の国土の成り立ちを見せて欲しいと願いを述べ、その仏国土より優れた点を選び取り、発願し、五劫の間思惟して行を選び取った。願と行を選び取った法蔵菩薩は、師に向かい 48 の願 (四十八願)

を述べた。

続けてこの願の目的を述べ重ねて誓った。

そして兆戴永劫にわたり修行し、願が成就し、無量寿仏（阿弥陀仏）と成り、その仏国土の名が「極楽」とであると説かれる。願が成就してから十劫が経っていて、阿弥陀仏の徳とその国土である「極楽」の様子が説かれる。

## 下巻

極楽浄土に生まれたいと願う者は皆、仏になることが約束され、阿弥陀仏の名号を聞信し喜び、心から念ずれば往生が定まると説かれる。（以下略）

-----  
上記「四十八願」（弥陀の本願）が極めて重要とされているので、以下その中で最重要とされている第 18 願「念仏往生の願」と、家内の極楽往生を願って、第 35 願「女人成仏の願」を⑥に従って紹介したい。

### 第 18 願「念仏往生の願」

原文・設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗正法  
訓読・設（も）し我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂（しんぎょう）し、我が国に生ぜんとして、乃至十念せんに、若し生ぜずば、正覺を取らじ、唯五逆と誹謗正法は除く。

⑥には、詳細な註がついているが、そのままでは難解なので、はじめの部分を要約したものをご覧に入れる。

-----  
法然は、「選択集」の本願章の私釈に、善導の意図をとって念仏往生の願と名づけている。また、総じて四十八願をすべて念仏往生の願とするも、別して第十八願を本願中の王と呼んでいる。

この願は、中国・日本の浄土教家たちによって、四十八願中の限目として重視され、願文の解釈は、各宗派の教学の根本的立場を示すものとなった。例えば、浄土宗では心に至心・信樂・欲生の三心を具足して、口に称名念仏を相續する衆生を救うことを誓った本願とした。

これに対して、真宗は仏に向って三心具足の念仏行を修するとはみずに、第十七願に警われた諸仏称識するところの名号を聞き、下巻の願成就文（親鸞最独自の読み方によって、如来より衆生に適向された三心と解する）にいう如来廻向の三心の起るとき往生は決定すると解して、称名念仏はそれ以後の仏恩報謝の行あるとする。

-----  
以上をもう少し解り易く言うと、⑤『現代日本語訳 法華経』の中で正木氏が言っている言葉を借りると次の様に言えると思う。法然は、私たち全員のなかには、生まれつき「仏の胎児」が宿っているので、修行次第で仏になれると考えた。しかし、親鸞は、万人に、「仏になれる可能性＝仏の胎児」ではなく、「仏そのもの」が宿っていると考えたのである。

### 第 35 願「女人成仏の願」

原文・設我得佛 十方無量 不可思議 諸佛世界 其有女人 聞我名字 歡喜信樂 發菩提心 厭惡女身 壽終之後 復爲女像者 不取正覺  
訓読・たとい、われ仏となるをえんとき、十方の無量・不可思議の諸仏世界、それ女人ありて、わが名字を聞き、歡喜信樂し、菩提心を發し、女身を厭惡せん。（その人）壽終りてのち、また女像とならば、正覺を取らじ。

これも⑥には、詳細な註がついているが、要約したものをご覧に入れる。

-----  
法然は女人往生の願といい、親鸞は女人成仏の願、變成男子の願と呼んだ。「法華経」に説く八歳の竜女が成仏するという教えとともに、この願は古来有名である。

浄土教では、女人成仏の願がなぜ別に誓われているかの理由に二説をあげ、第一はすでに第十八願において男女老少のあらゆる衆生が救われると誓っているが、女人は本性上うたがひ深いから、別願をもうけて女人の疑心を除こうとした。第二は親鸞の和賛に明かすごとく、弥陀の大悲の深きこと・仏智の不思議を示さんとして女人成仏の願を別出した、という。

ちなみに婦人を宗教的に差別してはならぬという思想は原始仏教以来存する。  
『心よく静まり、智慧が顕われたならば、正しく法を見るものに、女性たることが何の障りがありましょう。  
われは男か女かと、かくのごとく惑って、そもそもわれは何ものぞや、と思う者こそ、悪魔が語るにふさわしいのです。』（『サンユッタ：ニカーヤ』第一巻、p.129）

また、"女身を厭悪せん"とは、女身たることをいとうための修行をせよ、ということではなく、女身たることの罪深きあさましさを思い知る、ということが厭悪の意味であると、真宗は解釈する。

-----  
親鸞も恵信尼との結婚以外にも女性との関係について諸説あるようだが、女性の心の奥底に理解できない深い闇を見ていたのだろうか。

それが関係しているのかは分からないが、真宗でも女性に対する偏見があった事を感じるのである。そしてそれは私も解るような気がするところも多々あるが、何はともあれ家内の極楽往生を偏に願うものである。

## II. 藤田宏達、前田恵学による研究

本ホームページ掲載の『宮沢賢治と法華経』でも話したが「法華経」を読んで、これはおかしい、ブッダはそんな事言うはずがない、と思った私は「浄土三部教」を読んでもこれはおかしいと思ったのである。

そして、この問題に取り組んでいる書籍を探して下記書籍を見つけたのである。

⑦ 藤田宏達著『浄土三部経の研究』岩波書店 2007年

⑦の「はしがき」によると

-----  
実は、インドで成立し、中国・日本に展開した浄土思想に対して、内外の識者の中から、種々な疑念が提示されている。それは、つまるところ浄土思想が仏教の本流をはずれた特殊な教えではないかという疑念である。

例えば、無量寿経と阿弥陀経のサンスクリット原典を世界に初めて紹介したマックス・ミュラー(F.Max.Muller, -1823-1900)氏は、この二経と『観無量寿経』にもとづいた宗教、つまり中国・朝鮮・日本の浄土教について、このように言う。

「それは仏教の一部門と呼んでよいが、その宗教の最も本質的な諸点について、われわれが仏教として通常理解しているところとは大いに異なっている。だから、その系統に別名をつけると、全体として多くの混乱が避けられるであろう。(以下略)

-----  
この問題に正面から向き合った一人が藤田宏達氏である。

氏は我々と同年輩(1928-)の学者(東大印哲卒)であるが、同時に真宗の僧侶でもあるので、この問題を学問的に決着をつけたいと思ったのだと思う。そして比較文献学の方法論も駆使して取り組んだのである。

藤田氏は先ず、⑧(東大印哲に提出した博士論文にほぼ同じもの)を発表し、これは1971年度の日本学士院賞を受賞している。

その後、⑦にて議論を精緻化すると共にそれ以降、法然、親鸞に至る思想の展開を明らかにしている。

⑦藤田宏達著『浄土三部経の研究』岩波書店 2007年

本文 619頁+附章など 162頁

⑧藤田宏達著『原始浄土思想の研究』岩波書店 1970年

本文 630頁+索引など 48頁

しかし、仏典の素養に乏しい小生では歯が立たないところだけであった。

その例を一つ示したい。

⑧第3章 阿彌陀仏の起源 第2項 法藏説話の検討 1 本生説話としての性格 pp.346-347 からである。

阿彌陀仏の本生説話は、法藏説話を含めて全部で十六説あるが、その中で、最も重要な役割を演じたのは、いうまでもなく法藏説話である。法藏説話以外の十五種の異説は、なるほどそれぞれ阿彌陀仏の本生を説くけれども、しかし必ずしも阿彌陀仏の本生のみを説いているのではない。

(中略)

ところで、法藏説話が説かれる經典上の性格についてみると、これは大乘經典一般において過去の因縁物語をあらわすプールヴァヨーガ (purvayoga) の一種と見られるが、具體的には十二分教のアヴァダーナ (avadana) の形式を採用し、かつジャー タカ (jataka) 的性格を濃厚にもったものといえることができる。

法藏説話のアヴァダーナの文學形式を採用していることは、<無量壽經>の当該部分をサンスクリット本によって見ると、

「アーナンダよ、昔、過去の時、今を去ること無數劫の、さらに無數・廣大・無量・不可思議の時、その時分に燃燈と名づけられる如來・應供・等正覺者が世に出現した。

(ここに相当する2行を超えるサンスクリット語があるが省略)

という文で、この説話がはじまっていることで明らかである。

(以下略)

上文で、ジャータカは分かるが、アヴァダーナや十二分教などの専門用語が分からない。もともと、⑧は博士論文そのものに近いものだから、これらについて基礎知識を持った読者を対象にしたものだからであろう。

そして、この辺りを探索して次の書籍を見付ける事が出来た。

⑨前田恵学 『原始仏教聖典の成立史研究』山喜房佛書林 1964

前田氏も東大印哲出身、真宗僧侶でもあり、これも博士論文そのままに近いものらしいが、この論文により、39歳で日本学士院恩賜賞を受賞(人文系研究者では、未だに最年少での受賞者である)との事である。

ここで、話が逸れるが、日本学士院恩賜賞、日本学士院賞について若干触れてみたい。前者は年に1~2件選出という大変名誉のある賞で、後者も年9件程度選出のこれもまた名誉のある賞である。

かつては別個に選ばれていたのだが、1970年以降は後者が選ばれ、その中から1~2件が恩賜賞となる様に制度が変更されている。

調べてみると、我々に馴染の方々では、野口英世、湯川秀樹、私に近い人では三島徳七(MK鋼の発明者、私の在学中は学科主任)、制度変更後では赤崎勇 各博士などが恩賜賞を受賞している。学士院賞では、三島教室を引き継いだ橋口隆吉先生(金属内部摩擦の研究、所謂橋口ピークの発見者)が居られるが、半導体材料関係の人に知って頂きたい人で飯盛里安博士(日本化学会会長、分析化学会会長)が頂いている。飯盛氏は我らの先輩故・加藤宏さんの実父である。

話を本題に戻す事にする。

⑨を読んでみると、前田氏の頭脳の飛び抜けた明晰さが分かる。さすがに博士論文がそのまま恩賜賞に値するだけの事はあると感服はしたが、やはり内容は難解で、私の能力では簡単には要約することが出来ない。

それで、藤田氏、前田氏が彼らの研究をベースにした解説的なものを書いてないか探してみることにした。

そして、藤田氏はそのような事に関心が無いのか、見つからなかったが、前田氏にはいくつかあって下記に纏められている事が分かった。

⑩前田恵学集 第5巻 『文学として表現された仏教』山喜房佛書林 2004

以下⑩に従っていくつかの論点を紹介する事にしたい。

先ず、「文学として表現された仏教」とは何か、⑩の標題紙の裏にある文をご覧ください。

哲学は理性の世界に属する。しかし文学は感性の世界により深く関わっている。仏教の三蔵のうち、律と論はともかく、経を読むには研ぎすまされた純な感性をもって読まなくてはならない。ジャータカや大乘の経典は殊に然りである。世俗的な文学の分野の中でも、ファンタジーの領域は、それが虚構であっても、リアリティの現実よりも遥かに強烈なリアリティを感じさせるものがある。そこに真実の世界がある。それを感得するには、理性的になりきった文化人よりは、生来の野性をもった人の方が勝っているように思われる。人間は教育を受けることによって理性を養うが、それに見合う形で野性味を失っている。「愚か者になって念仏せよ」と言われたりすることも、このことに関係していると思われる。文学は何が真実かを我々に問うている。

これは私にも共感できるところが多い。

先ず、⑩の第1章 第1節 序論---インドにおける仏教文学の成立とここに依用する資料の性格を pdf 化したので下記赤枠をクリックしてご覧ください。

インドにおける仏教文学の成立

尚、何時も言っている事だが、上記 pdf を読むのには、上記 URL をクリック後、"CRL"キイ+"SHIFT"キイ+"-"キイを同時に押して文章を反時計方向に 90 度回転させると読み易くなる事を再度お伝えする。

この序論には、下記内容が簡潔に述べられている。

- i. 釈尊の教えを弟子たちが如何に伝えて行ったか
- ii. それらを分類整理する必要性が生じ、九分経が成立、その中にジャータカが含まれる。
- iii. 九分経の分類に合わないものが現れ、十二分経に分類、その中にアヴァダーナが含まれる。
- iv. ジャータカとアヴァダーナの違い。

次に、上記予備知識を前提に、⑩の第3章 『無量壽経』の性格 二、『無量壽経』の阿弥陀仏を pdf 化したので下記赤枠をクリックしてご覧ください。

『無量壽経』の阿弥陀仏

この中に、下記内容が述べられている。

1. 阿弥陀仏の前世---法蔵菩薩の修行---
2. 新たな性格をもって成仏した阿弥陀仏
3. 阿弥陀仏の思想の展開---親鸞聖人の和讃に関連して---

ここでは、この中から前田氏の考えの重要な中核を成すと思われる部分を、少し長くなるが、上記 2. から特に抽出して紹介したい。

二、新たな性格をもって成仏した阿弥陀仏

さていま成仏した仏、すなわち阿弥陀仏は、これまでの過去仏とは、その性格を異にしている。その最も顕著な特徴は、その寿命が無量長久にして極限なしとせられる点である。すでに世自在王仏の寿命が四十二劫と言われているように、他の五十三仏等すべて、その寿命が長大であるとは言え、やはり有限であった。有限であればこそ、五十三代とか五十四代とかの仏の系譜を作りえたのである。

どこかで始まり、どこかで終る。これがそれまでの過去仏の性格であった。

インドにおける過去仏思想としては、六仏を立て、現在の釈迦仏を第七仏とするのが最も素朴な古い段階の形であるが、そこでもこの事情は変わらない。

しかるにいまここに始めて真に無限の寿命を有する仏が出現したい。過去・現在・未来の

仏の系譜の上にある諸仏と、新たに生まれた阿弥陀仏とは、いかなる関係において、共存しうるのでしょうか。

(中略)

ところで、インド仏教本来の伝統的な考え方に従えば、一娑婆世界に出現しうるのは、一仏のみである。

過去仏無錠光如来以来、つづいて次第したということは、一仏のいます一娑婆世界が終って、次の仏のいます次の娑婆世界が始ったのであり、かくの如くに次第したことを言うのであろうと思われる。

かくしてこの娑婆世界に出現し、また出現するであろう仏は、いずれも寿命有限であった。有限であったからこそ、次の仏と交替できたのである。有限ではあるが、この娑婆世界に一仏のいます限りは他の仏の出現する必要はなく、次仏の出現はさらにのちに延ばされねばならぬ。

しかるに阿弥陀仏は、十劫の昔に成仏し、永遠の寿命を獲得して、現にいますという。してみれば、阿弥陀仏は、現に仏のいます娑婆世界の中において、過去・現在・未来の在来の仏の系譜の中には位置しえないこととなる。娑婆世界の外に、他方仏として定置されたのはこのためである。

前生を過去仏の世界において、すなわち娑婆世界において過したはずの阿弥陀仏が、ここで突如として、その住所を変えて登場することとなる。阿弥陀仏の住所は、娑婆世界を距ること「十万億刹」とせられる。

この位置づけの背後には、一娑婆世界には一仏として次第する仏の系譜の思想が存在していた。

もしこのインド的な世界観の制約の下にあって、娑婆世界に内在してしかも永遠の寿命を有する仏を考えるとすれば、それは特定の仏の固有名を立てることができず、過去・現在・未来の諸仏を貫く法とか精神の如きものとなるであろう。

『法華経』にいう「久遠実成の本仏」という考え方は、このような性格をもつものと見られる。これは理仏であり、具体的人格的な名称をもちえない法身仏である。

法身仏は超経験的なものであり、理念的にのみ明らかにされるものである。

『無量寿経』の阿弥陀仏は、かかる性格をもった単なる理念上の仏ではない。

『無量寿経』の立場は、阿弥陀仏を、かつて娑婆世界に出現した過去の諸仏と、あまり異なるところのない仏として見る立場から出発している。

『無量寿経』が、伝統的な *avadana* の形式を採用したのも、そのためである。

あるいは、*avadana* の形式を採用した結果、そう考えざるを得なかったとも言う。恐らくは、その両方ともに真実であるかも知れない。

『無量寿経』の阿弥陀仏は、経験によって把握できるものとして画こうとされている。

にもかかわらず、これらの諸仏は、娑婆世界にあって、やはりなお因果の法則を脱していない。

しかるに阿弥陀仏は、娑婆世界を超越した世界にあって、因果の法則を脱している。

浄土とは本来的には、因果の法則を超越した世界という意味をもつ。

因果の道理を超越しえた故に阿弥陀仏は無量寿たりえたのである。

(後略)

-----  
如何であろうか。前田氏の構築するロジックの切れ味の良さが感じられると思うのだが。

ただこの辺りは、藤田氏の領域でもある。藤田氏の微に入り細に入った検討ではこのようにすっきり纏めるには抜け落ちる部分が多すぎるのかも知れない。

## 終わりに

当初、亡くなった家内の冥福を祈る為もあって、菩提寺の宗派である浄土真宗の基本経典である浄土三部経に取り組んだが、すぐに私の性格(それは本ホームページの掲載からも分かると思うが)でその原点を探りたくなり、自身の素養のほども省みずに藤田氏、前田氏の著作と格闘することになってしまった。

そして私の見るところ、両氏もブッダの原点に近づく探求で大きな成果を挙げたとは云え、納得できる結論を得たとは言えないと思っている。

そして私の大乘仏教の本質への取り組みは次の書籍(⑩)の検討などまだ続いているが、それらについては別稿としたい。

⑩大竹晋著 『大乘非仏説をこえて』…大乘仏教は何のためにあるのか

図書刊行会 平成 30 年 8 月 20 日発行

その腰巻には次のようなPRがある。

『それは、仏教が仏教をこえるためにある！

原始仏教・部派仏教とは異なる 大乘仏教の存在意義を明確に説く

斬新な大乘論！』

完